

国際児に見る国籍と「国定性」の実態調査

村上 征 勝

1. 研究目的

昭和60年1月1日より施行された新国籍法では、国際結婚によって生まれた重国籍を持つ子供（以下国際児と呼ぶ）は、22歳になる前に国籍を一つに選択しなければならないと定めている。この新国籍法に対し、当事者である国際児はどのような意見を持っているのか、また国籍を一つに決めるとすれば、どのような理由でどちらの国籍を選択するのかを調べるのが本研究の目的である。

2. 調査概要

調査対象：13歳～30歳までの日本人と米国人の間に生まれた国際児

調査期間：昭和60年6月～昭和61年10月

調査法：郵送法、留め置き法及び面接調査法

回収数：アンケート回収数91（有効部数79，内：男40，女39）

3. 調査結果

現在分析中であるが標本数が小さい為に、今後の調査を待たねばならない点が多い。ここでは、紙面の都合上今後の課題と考えられるものを2点だけ述べる。

- i) 「国籍を一つにすべきである」という意見と「一つにするか否かは本人の自由意志に任せるべきである」という意見に関しては、前者に賛成が20%、後者に賛成が74%、不明6%であった。また新国籍法の賛否に関しては、賛成42%、反対54%、不明4%であった。

[課題] 「国籍を一つにするか否かは本人の自由意志に任せる」という後者の意見に賛成した人は、22歳になる前に国籍を一つに絞るという新国籍法には反対するのではないかと予測したが、15名のものが賛成にまわっていた。単に「ほんね」と「たてまえ」の違いとして片付けて良いかどうか？

- ii) 新国籍法の賛否と母親の国籍との関係は次のようであった。

	日	米	日 米	米 他
賛 成	24	8	1	0
反 対	14	23	5	1

[課題] 母親の国籍によって多数意見が異なっているが、これはどのように考えるべきか？ 現在住んでいる国が新国籍法の賛否に影響していないことを考えると、この結果は興味深い。

本研究は植木武（明大）、杉山明子（NHK放送文化研）、香村博正（香村法律事務所）の各氏との共同研究であり、トヨタ財団研究助成金を受けて行われた。

日台比較にみられる少年の日常体験

千 野 貞 子

目 的

筆者は先に、日本の小中学生の自然体験、生活習慣などを統計的に分析し、その結果から彼等の自己

啓発的行動力の希薄を指摘した(第97回日林論, 1986)。そこには、友達と遊ぶことも少なく、受験競争に駆り立てられている孤独な子供の姿がある。又、学校における“いじめ”も大きな社会問題として取り上げられている。これらを思うとき、原因究明の手段として子供世代の現実を的確にとらえることが急務である。そのような意味から、多岐にわたって日本の過去を彷彿させる台湾の小中学生の生活構造を日本の同世代と比較し、検討することを意図した。台湾調査により日本の過去の射影が得られるなら、かつての素朴な子供の姿と現実の子供との比較は高度成長のもたらした教育上のデメリットの反省として意味あることと思われたからである。

調査対象

日本では、既報告のとおり関東地区及び福島県の8都県在住小中学生延べ1,928人、台湾では、台北市在住中学一年生60人、台中市在住小学5,6年生310人が調査対象となった。

質問内容

自然体験、生活体験、日常生活習慣、学校、家庭、家の周囲等の環境など、総計93問について、アンケート調査を学校単位で行った。

結果と考察

日台比較で大きな差の見られた(AIC値により判定された)質問を下表に示した。生活に密着した手伝いでは、台湾の子供の方がよくやっている。困った時の相談相手として、日本では先生や父親を選ぶケースが極端に少く、台湾の方が有意に多い。しかも台湾では、父親のしつけが母親よりも厳しい。この結果からも、日本の子供達にとって父親不在、更に子供自身の家庭からの遊離などが、今後の教育上の問題として取り上げられるべきことが示唆されたように思われる。

日本の方が経験豊富			台湾の方が経験豊富		
項目	日本	台湾	項目	台湾	日本
雪を食べる	42%	2%	果物をむく	89%	59%
霜柱を見る	76	18	友人と遊ぶ (1時間位)	39	10
海で泳ぐ	58	18	洗濯物干し	63	33
焚き火	52	13	おんぶ	81	44
アイロン掛	53	10	家族で海山	40	12
蛇に出会う	41	21	掃除の手伝	78	51
スキー	14	2	相談相手		
虫さされ	61	30	— 父	13	4
川で泳ぐ	30	17	— 先生	23	3
買物に行く	49	38	— 母	28	21
食事の挨拶	81	69	洗濯をする	56	28
忘れもの	72	47	ゴミを捨てる	60	30
家族が入院	22	11	日の出入り	52	27
正しく			食事の手伝	75	54
ハシを持つ	55	31	草花を摘む	58	39
薪で炊飯	18	15	オムツ換え	35	17
朝晩の挨拶	72	55			

今回の台湾調査は、玉川大学農学部許田倉園教授、太一广告有限公司、林惟瑞研究開発主任の御協力の賜である。研究の一部は、昭和61年度統計数理研究所共同研究(61-共研-73)による。

order k の離散分布とその性質 (2)

平野 勝 臣

59年度研究発表会に於いて同標題で論じた後、文献[1][2][3][4]にあるように幾つかの新しい order k の分布が定義され、性質が調べられた。

成功率 p のベルヌーイ試行で連続した k 回の成功の事象 ε を考える。 n 回の試行で ε の起こる回数の分布を order k の2項分布、 $B_k(n, p)$ 、という。 ε の起こるまでの試行数の分布を order k の幾何分布、 $G_k(p)$ 、という。 $G_k(p)$ に従う独立な r 個の確率変数の和の分布を order k の負の2項分布、 $NB_k(r, p)$ 、といい、 r が正の実数に対し拡張される。この台を $\{0, 1, 2, \dots\}$ 上にずらした分布を $\overline{NB}_k(r, p)$ 、とかく。 $\overline{NB}_k(r, p)$ で $r \rightarrow \infty$ ($q \rightarrow 0, r q \rightarrow \lambda > 0$) とした極限の分布を order k のポアソン分布、 $P_k(\lambda)$ 、という。 $\overline{NB}_k(r, p)$ に従う確率変数で1以上の条件の下で $r \rightarrow 0$ とした極限の分布を order k の対数級数分布、 $LS_k(p)$ 、という。以上が拡張される (Aki [1])。 k 個の定数 p_1, \dots, p_k は $0 < p_i < 1$ 。 ① $X_0 = 0$ as, 且つ $X_i = 1$ or 0 ($i = 0, 1, 2, \dots$) ② $P(X_m = 1 | X_0 = x_0, X_1 = x_1, \dots, X_{m-1} = x_{m-1}) = p_j$, 但し $j = r - \left[\frac{r-1}{k} \right] k$, r は $x_{m-r} = 0$ を満たす最小の正整数。以上で決まる2値確率変数列 X_0, X_1, X_2, \dots に対し、 X_i を試行、それが1をとれば成功、0をとれば失敗とする。このとき前に述べた分布に対応する分布が導かれ、順に夫々 "拡張された" という語をつけ、 $EB_k, EG_k, ENB_k, EP_k, ELS_k$ で表わす。

つばのモデルから定義される分布 ([4]で確率関数が与えられている)。 a 個の白玉、 b 個の黒玉が入ったつばから非復元抽出で1個ずつ n 回抽出し、 k 回連続した白玉の事象の起こる回数の分布を order k の超幾何分布、 $H_k(a, b, n)$ 、という。復元抽出だが次の抽出の前に、前に抽出した玉と同色の玉を c 個加え、 $c+1$ 個にして戻す。 n 回の試行中に k 回連続した白玉の事象の起こる回数の分布を order k のポイヤ分布、 $P\acute{o}l_k(a, b, c, n)$ 、という。 $c=1$ のとき、 order k の負の超幾何分布、 $NH_k(a, b, n)$ 、という。このとき次の(1)~(4)を [2] で得た。

- (1) $B_k(n, p)$ の平均値の explicit な表現。
- (2) EB_k の確率を求める漸化式、pgfの漸化式と explicit な表現、平均値の母関数。
- (3) $H_k(a, b, n)$ の確率を求める漸化式、pgf (超幾何級数表現)。
- (4) $P\acute{o}l_k(a, b, c, n)$ の pgf (超幾何級数表現)。

EP_k や $P_k(\lambda)$ の具体例の調査。ある時刻からある時刻までの、ある短い時間内に高速道路のある地点を通過する車の乗車人数の和の分布を調べ、これらの分布にあてはまることがわかった。

この他、 $LS_k(p)$ の p のモーメント法による推定の解の一意性、 [1] で示された $ENB_k \rightarrow EP_k(\lambda)$ の別証等幾つかの性質を導いた。

参 考 文 献

- [1] Aki, S. (1985). *Ann. Inst. Statist. Math.*, **37**, 205-224.
- [2] Aki, S. and Hirano, K. (1986). *Res. Memo. No. 316*, The Inst. Statist. Math.
- [3] Hirano, K. (1986). *Fibonacci Numbers and Their Applications*, D. Reidel, 43-53.
- [4] Panaretos, J. and Xekalaki, E. (1986). *Comm. Statist. Theor. -Meth.*, **15**, 873-891.